

## 北浦定政 関係資料補遺

北浦定政関係資料は、その曾孫である北浦直人氏から、1992年に「平城宮大内裏址坪割之図」「平城旧址之図」や齊藤拙堂の旧址之図序文、大田垣蓮月短冊などを除いて、当研究所に寄贈された。それを受けて『北浦定政関係資料』（以下『関係資料』と略す）を1997年刊行し、その資料目録を目録篇として収載したが、その後寄贈分の整理作業や北浦家において行った補足調査により、既刊目録に追加補正する箇所が生じたので、ここに報告する。

○北浦定政画像（『関係資料』口絵図版23） 1幅  
縦93.5cm、横35.3cm。掛幅装、絹本彩色で、上辺に賛辞世があり、右下隅に「桃里」朱方印が捺印され、外題に「北浦家第十代義助定政像」とある。この掛軸は新旧の2箱に収められているが、その箱書を次に掲げる。

[旧箱]（蓋上書）北浦定政肖像画 賛辞世 伏見文秀  
女王殿下御染筆（「」改行を示す）

（蓋内貼紙）北浦定政藤原定政肖像 明治四辛未  
年正月七日 没年五十五

辞世 伏見文秀女王殿下御染筆 画ハ大和十  
市郡桜井村之人岡本桃里

[新箱]（蓋上書）贈従五位北浦義助定政画像  
（蓋内書）祖父定政ガ明治四年正月七日逝去ノ直  
後歌道ノ弟子ニシテ画工トシテ御陵実 地調  
査ニ従ヒタル岡本桃里カ画キタルモノニシ  
テ、辞世ハ文秀女王御染筆ナリ 大介識

また、「平城宮大内裏跡坪割之図」「平城旧址之図」や齊藤拙堂の旧址之図序文などは、一括して「北浦定政遺稿平城京大内裏坪割図並齊藤拙堂序文」との箱書きのある箱に収められて、別置されているが、その主立ったものは、次のとおりである。

○平城宮大内裏跡坪割之図（Ⅰ-七-36）

○平城旧跡之図（Ⅰ-七-37）

○齊藤拙堂書状（Ⅴ-一-一） 横切紙、縦15.6cm、  
横 54.5cm、1紙。

齊藤拙堂書状（Ⅴ-一-二） 横切紙、料紙縹色紙、  
縦15.4cm、横59.2cm、2紙。

齊藤拙堂平城大内敷地図序文（Ⅴ-一-三） 続紙、  
縦31.4cm、横106.4cm、3紙。

齊藤拙堂書状（Ⅴ-一-四） 縦切紙、縦31.5cm、  
横16.9cm、1紙。

齊藤拙堂書状・序文は、『関係資料』目録篇ではⅤ-一-2～4で卷子仕立てとあるが、Ⅴ-一-1～4で一巻と修正する。

○打墨縄（Ⅰ-一-1）

○北浦家譜・北浦親族家系（Ⅳ-一～四）

短冊では、『関係資料』目録篇のⅤ-六短冊目録で、1～10の整理番号が付され、単品の扱いになっているものが、「白椿帖」という短冊帳の一部であることがわかった。この短冊帳は、縦39.5cm、横18.3cmの旋風葉で、帙を伴う。帙の外題に「白椿帖」とあり、内書きに「大正十五年正月整理」とあり、定政の孫大介氏の整理にかかるものであろう。短冊は全部で51点あるが、目録篇所収の10点の他は、定政26点、子定功3点、蓮月3点、重徳・季鷹・泰洲・式部女・□功・聖僧各1点、無名3点である。その中には、北浦家伝来の他、大介氏の整理の短冊帳にその後収集追加されたものもある。

それ以外定政の書跡を掛幅装にしたものに、次のようなものがある。

○北浦定政歳暮参歌（大王につきて賢き云々） 1幅  
紙本墨書、掛幅装。縦37.6cm、横62.2cm。長短歌  
各1首を記す。

○北浦定政水鳥之歌（内日さす都に近き石橋の云々）  
1幅  
紙本墨書、掛幅装。縦30.8cm、横39.5cm。長歌と  
短歌2首を記す。

○三つの宝を  
紙本墨書、額装。縦62.2cm、横36.3cm。「三つの  
宝を」との題で短歌を記す。

以上、3点は定政自筆と考えられる。それ以外に、

○贈従五位北浦義助定政辞世歌関係書簡 1幅  
掛幅装。縦54.1cm、横24.5cmと縦16.0cm、横28.7cm  
と縦16.1cm、横25.8cmの3通の定政墓碑建立関係の  
書簡を合装したもの。

また大田垣蓮月書状は、『関係資料』目録篇ではⅤ-一-5～18で掲げられているが、これは5～9、10～13、14～18でそれぞれ卷子本に仕立てられて一箱に収められ

ており、『関係資料』目録篇の104頁9行以下の記述は修正する必要がある。各書状の形状、法量等と併せて補足目録を作成する予定である。

以上、北浦家に所蔵される資料のうち定政に直接関係のあるものについて報告した。

次に北浦定政関係資料に関する調査は、北浦家関係以外の関連資料についても行っているが、そこで判明したことを報告する。

『平城宮跡保存の先覚者たち』展図録(1976年)では、「平城大内敷地図」とある北浦家蔵のものは、淡彩で平城京条坊並びに南都部分を描く図である(『先覚者展図録』p.6)。その名称は、この図の序文である齊藤拙堂の文頭に「平城大内敷地図」とあるところによる。ところで、『先覚者展図録』では、「平城旧址之図」といわれるこの図の明治時代の写本が奈良県立奈良図書館、柳沢文庫に存在することが指摘されている。この図は『関係資料』目録篇では、「平城旧址之図」とした図である(I-7-37)。この北浦家蔵本「平城旧址之図」は、前記のごとく平城京条坊並びに南都部分図のみである。その他の図に見られる上辺の「平城旧址之図」との題字や図周辺に記載の定政の平城京城の道路の地勢に関する現状把握の記述、そして齊藤拙堂の序文は伴わない。

ところが、奈良図書館蔵本や柳沢文庫蔵本には、題字があり、図周辺の記載、拙堂の序文がある。図自体はともに明治時代の写しであることが明瞭なものであり、その識語もある。柳沢文庫本は原本をまだ実見していないので、奈良図書館本につき述べる。

法量は、本紙縦121.7cm、横75.7cmの紙表装である。外題に「平城旧跡模図」とあり、図下辺の拙堂序文を写し、それに次いで以下の識語がある。

(識語) 北浦氏始著此図、西村禽江画之、其後富田光美嘗模写之、向余偶遇富田氏之家因請之、持以歸再模之、奈良博覧会社々長植村久道氏嘗訪吾家、觀此図、嘉其精確、欲模写其図画、以永藏社焉請余、々乃命兄玉英模写之、余亦或補之、遂其業、若夫北浦氏其人、則拙堂翁序文既画之、嗚呼觀此図者、可以見南都七代郁文之一班也哉、

明治十七年五月 帶川橋本藤一

この識語から、定政が作図したものを禽江が描いた元

図の存在がしられる。その模写を富田光美(春日社祠官)が行い(富田光美模写本)、再転写を橋本藤一(文政5~明治19。奈良町奉行与力であった)(橋本藤一模写本)が行い、さらに植村久道の依頼を受けた橋本藤一が明治17年に兄玉英に模写させたもの(兄玉英模写・橋本藤一補写本)、すなわち奈良図書館本にとつづくことがわかる。この図では、何坊大路の「坊」が「防」になっていること、外京の南方に「紀寺村池」付近から、南方へと西方へと添上郡京東条里の坪界点を示すと思われる小朱十字点の存在が注目される。

なお、柳原文庫本には、条坊図周辺の大路の地勢に関する記載はなく別系統かと考えられるが、識語は次のとおりである。明治乙酉は、明治18年に当たる。

(識語) 明治乙酉二月 浪速商山僊叟矢部朗書

ところで最近、同種の絵図2点(菊水楼蔵本、鍵元家蔵本)を見る機会を得たので、ここに報告する。

それはともに、上辺に題字、中央に平城京条坊並南都図、条坊図周辺に大路地勢の記載、下辺に齊藤拙堂序文があり、共通の構成を採っているが、識語の類はない。捺されている印章の印文は同一であるが、同一印ではなく、いずれかがまたは共に模刻印かと思われる。ところで、両図共に何坊大路の「坊」の字は「防」と書き誤っており、そこにも共通性がみられるが、外京南方の朱十字点は菊水楼本には見られず、また図様、筆跡などからみて菊水楼本が古いと考えられるが、それが西村禽江筆写本といえるかどうかは、今後の類似の写本の調査と検討にかかろう。いずれにしても、北浦家に所蔵される「平城旧址之図」を中央に、その周辺に「平城宮大内裏跡坪割之図」の大路の地勢に関する定政の観察知見を記し、齊藤拙堂の序文を下辺に配し、上辺に「平城旧址之図」との題字(「址」の字は各異なる)を書くという構成の図が、それらの成果を集成した図として位置づけられよう。

それ以外にも管見に同種の絵図の存在が確認されているが、今後さらに、これら定政関係の図面類について、原本に即して調査を行っていきたいと考えている。

北浦家の調査や奈良図書館本の調査においては、岩本次郎調査員などとともに調査を行い、それ以外の図面については、史料調査室員とともに実見したが、当報告の文責は綾村にある。(綾村 宏/歴史研究室)